角川文庫
—2109—

晶子曼陀羅

佐藤春夫

角川書店

昭和三十七年四月二十日　初版發行
昭和四十四年八月三十日　九版發行

定價は、帶・カバーに明記してあります

角川文庫

羅陀曼子晶

著作者　佐藤春夫
發行者　角川源義
印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田橋一ノ二

發行所　東京都千代田區富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京一九五二〇八
株式會社　角川書店
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

Printed in Japan　曉印刷・熊倉製本

晶子曼陀羅

佐藤春夫

角川文庫
2109

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

晶子曼陀羅自敍

これは勿論、晶子傳ではない。また晶子論でもない。とは云へそれらの要素をも幾分は帶びないではあるまい。しかしその生きた時代の空氣のなかにこの女戀愛詩人の人がらを寫したいといふのが作者の企てたところなのだから、傳や論ではなくむしろ像の方なのである。ところで詩人を描く以上は詩的な作品をといふ念願がパン種の利きすぎたかのやうにふくれ上つて、詩人とはどういふ種類の人間か、詩とは何で、どうして形成するか、それはどう讀み味はふべきか、その他、我が詩に關する一切の管見が期せずしてこの作品で具體化されたかの觀がある。

書きながら、必要上多く讀み漁り、讀み耽つた新詩社の詩歌に魅せられて詩魔に憑かれた結果であつたかも知れない。

時にはものがあつて自分のかたはらに來り囁いてこれを敎へ書かせたやうな部分もあつた。

これは自分の最初の意圖したとほりのものではない。と云つて、決して別の何物でもない。ただ神の分け前の異常に多い窯變なのである。

それにしても自分の書きたいもの、書くべきものを書いたといふ喜びは、最初に意圖したとこ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ろを意圖のとほりに書き上げた喜びに優るとも劣るまい。失敗した作だか、成功したのだか今は自分にも判らない。

讀みかへしてみて心にそまぬ節(ふし)、足りないと思ふ點ももとより無いではないが、暫(しばら)く發表當初のものに最小限の朱筆を加へてここに上梓した。

この制作に當つて湯淺光雄博士が年來蒐集の資料を惜しみなく提供された上、執筆中終始與へられた聲援に對してこの機に感謝する者である。

昭和甲午九月五日夜

東都目白坂にて

佐藤　春夫　誌す

目次

晶子曼陀羅自敍　三
第一章　十五の少女　九
第二章　父母の家　二〇
第三章　黑き胡蝶　三〇
第四章　鳳小舟　四〇
第五章　「明星」かがやく　五一
第六章　「東西南北」の人　六二
第七章　蓮に書く歌　七二
第八章　妻をめとらば　八三
第九章　永觀堂の秋　九五
第十章　みだれ髪　一〇六
第十一章　魔書出づ　一一六

第十二章　華頂山の春　一二六
第十三章　焔の翅　一三七
第十四章　渦潮の中　一四八
第十五章　黄金向日葵　一五九
第十六章　君死に給ふことなかれ　一七〇
第十七章　佳人薄命　一八一
第十八章　夕雲男　一九一
第十九章　魔王と女怪　二〇二
第二十章　海越えて　二一三
第二十一章　三千里外　二二四
第二十二章　流離の女　二三五
附　錄　ふたなさけ　二四六
解　說　奥野信太郎　二六二

晶子曼陀羅

繪そらごとまことまぼろしうた心
そぞろにつづる晶子まんだら

（作者）

第一章　十五の少女（一―五）

一

「ほう、どなたかと思へば、これはよくこそ。駿河屋さんのいとはん（令嬢）か。何はともあれ、まあお上り」

と主人の樋口氏の言葉に、小ざつぱりとした荒い久留米の袷に紫繻子の半幅帶を締めた小娘は、無言で一禮すると、既に勝手を知つたもののやうに、すたすたと玄關へ上りこんで、更に座敷の片隅へきちんとひかへると、あとから來て上座についた主人に、あらためてていねいな一禮をして、頭を上げるや、

「せんせ、うち學校の小田先生にうかがつたら源氏物語は白樂天の『長恨歌』から出たもののやうやつて仰言つたよつて、こちらの先生に『長恨歌』とやらを讀んでいただきたいと思ひ立ちましていきなり上りました。おそれ入りますが、こんな勝手なお願ひ聞いていただけませうか」

と、かう切り出されて、當の先生の樋口氏は心中少し狼狽氣味であつたが、根が正直な人の、すぐありのままを、

「わしは恥づかしながら、實のところ、この年になるまで自分の國のその名高い物語もまだよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

う讀まんので、それと『長恨歌』との比較などはできませんが、唯『長恨歌』を讀んであげるぐらゐなことでよろしければ」

「はい、それで結構でございますが、わたくしにはまだむつかしうございませうね」

「いやわかるやうに讀んでみて進ぜよう」

ていねいに稚兒輪の頭をさげた娘に對し、

「それで鳳さん、あんたはもう源氏をお讀みかの？」

「はい、一昨年あたりから、ほんの少しづつ、なぐさみに湖月抄などを手引に讀んでみてゐますけれど、たよりないわかりかたですんで、ようわからんとこは學校で小田先生に伺つてみて、それでもまだしつかりわからんやうなのです」

「一昨年あたりから？」

と樋口氏はわが耳を疑ひつつ、この娘幾つになつたのであつたか？　と思つて、また、

「學校は？」

と聞いてみると、女學校は今年本科を卒業して補習科といふのに入つたが、料理や裁縫家政などといふのでつまらないから、またこちらの塾へ通ひたくなつて來たといふだけで、一昨年の年齢はまだ判明せぬが、とにかくまだ子供。樋口氏はこの子供の早熟の才と好學心とに且つ驚き、且つわが身の菲才を今更に愧ぢた。

慰みに讀み出して投げ出しもせず、兄か父かに聞いたらうが、その注釋で本氣に讀みはじめ、今度は「長恨歌」まで讀み及して見たいとは奇特な心と云ふか、後生可畏とはこの事であらうか。

それにしてもこれが男の子ではなく、ましてあきうどの女で、豪家とは云へ、親にも當人にも氣の毒なこと、文明開化の當今は知らず、古來、女子の才あるは禍とやら、と樋口氏は心ありげにその小娘を見かへりつつ、襖の引手に手をかけて、

「では、ちよつとお待ち、本をあげる」

と云ひのこして、次の間に入つて行つた。

二

名ばかりの座敷は、猫の額ほどの空地に萩や山吹のほか樹もないのに面した八疊で、授業場と客間とを兼ね、夜は夫妻の寢室ともなる。襖をあけて入つた次の間の六疊といふのは納戸とも書齋ともまた臺所に近いあたりは茶の間を兼ね、同時に細君が内職のお針場でもあるが、老妻は老眼にこの窓の下のうす暗さを歎じて時には八疊へも進出する。僅にこの二間のほかは玄關の二疊。これが町の漢學者樋口氏の知新塾で、近くに芝居や勸工場もあつて堺の中心部の一隅とは云へ、宿院（といふのは住吉神社のお旅所）と寺町との中間のさびれた裏町のそれも古びた二軒長屋といふでもなく、家主が微祿して大きな邸の裏口の一部を仕切り便所をくつつけ二疊の入口をつぎ足して貸家としたといふ落ちつかぬ構へである。

樋口氏は多は古布子、夏は洗ひざらしを肩にかけて、この古家をも身の分にふさはしい寓居としてゐる。彼はもと伊勢の人とも和歌山とも兩方に云ふのを人は怪しむが、伊勢の松阪は和歌山藩の飛地だからどちらも本當で、まして彼は少年の日、志を立てて寄らば大樹の蔭と南葵德川氏

の御城下、和歌山に出て藩の儒學に學ぶうち忽ち維新の變に遭つて學も半で廢し、新時代に處する道を求めて大阪に出たが、當時、堺縣に教育と工業との大に興ると見えた時、その古い土地柄と新しい勢とに誘はれて、この土地の小學校に教職を望んでありつけず、さらばと紡績と段通會社とに書記か會計にでもとの望も他鄉人の身元の明かでないのは困ると採用にならない。路頭に迷ふ一歩手前を私塾でもはじめて見たらと云ふ人があつて、子弟を塾に通はせるゆとりのある良家の多いあたりをと求めて、此處に落ちついたのは、も早六七年も前であつたらう。

當初から通つて論語の素讀などを授けた九つの幼女が、今は女學校を出て補習科に入り、當時は髪も短かつた男姿が昔の筒袖を脱いで紫縮子の帶に稚兒輪の小娘となり、ひとりで源氏物語を讀み「長恨歌」をと云ひ出したのである。歳月人を待たず、志蹉跎たる白髪の歎は机邊の塵に埋もれた藏書の乏しさにも見出される。一ころは中等教員の國漢の檢定試驗にでもと意氣込んで買ひ蓄へた書物も何時しか空しく散じて、今は賣れ殘つてゐるうちの一冊に和刻本の「長恨歌」のあつたのを取り出して砂ぼこりをはたきはたき出て、座にかへり、

「本はこれです。お持ちになつて下讀みのつもりで淨寫してお置きなされ。寫本で讀んであげます——少し長いから寫すに骨は折れませうが」

押し戴いて抱き歸り、以前通ひ慣れた宿院小學校の前を運動場の大藤棚を横に見て二三町出ると賑やかな大道の通は南北へ一筋に市を貫いて大阪から和歌山への國道を北に淺香山の丘。妙國寺のと開口神社のと二つ並んだ三重の塔、それよりも一きは高い大樟をどんよりと花ぐもりの鈍い日ざしのなかに見ながら小娘は甲斐町のとつつきの東北の角店に本家駿河屋出店、御菓子司所、

煉羊羹所などの暖簾のかかつた傍の住居の入口をすべりのいい格子戸をあけて入つて行つた。

三

この朝、滿ち潮の高師の濱、住の江、ちぬの海、堺、岸和田、住吉、濱寺の一帶は海も陸も降りこめた春雨に、海も空も銀ねずみであつた。

堺の大道、甲斐町の駿河屋では二階の天井の低い一室で、召使らがしようとはんと呼び慣はしたこの家の三番娘が、土佐半紙をひろげて「長恨歌」の寫本に熱中してゐた。

元來、鳳晶子は筆名で、本姓は鳳、名もしようだから、その本名に上方言葉で令孃をいふいとはんのいを省略したとはんをくつつけてしようとはんといふ敬愛稱ができてゐた。

靜かな春雨に市中の物音もなごみ、こんな仕事には氣が散らない。また本には返り點があり、白樂天の美しい詩句もぼんやりとはわかり面白げなとしようとはんは興に乘る寫本の筆もはかどつてはゐたが、かう一日中部屋にこもつてそれにばかりかかり入つてゐたのでは、このごろ家に引き取られて來て、家事や店の仕事ばかりさせられてゐる腹ちがひの姉の花子にも惡いといふ心づかひもあつて、晝間を時々は母の手助けに臺所をのぞきに出かけ、夜は夜で店で小豆などを選る夜なべの仲間にも加はる。かういふ心づかひもなかなか細かいので召使や店の者たちにもいたはりがあり自然と親しまれてゐた。

そぼ降る雨は二日二晩ふりつづいた。寫本はその間にはでき上らなかつた。いくら興に乘り、氣があせつても夜は十二時になると電燈は消えるのであつた。

三日目は雨があがつてうららかないいお天氣がこの小娘をそはそはさせた。その心は眼前の本には無くて、海岸のお臺場に行つてゐた。お臺場といふのは品川のものと同じ時代に、同じやうにこの地に築かれたものだが、ただ品川のやうに海上にはなかつた。その上にのぼると海の風に養はれて特別に色あざやかな菫が今日のやうな日にはむらがり咲いてゐるので、お臺場の摘草はこの上なく樂しいものであつた。

その朝うららかな空を見出すとすぐ、

「ねえちやん。おひるからお臺場へ行こ」

と花子に囁いたが、姉はだまつて素氣なく首をふつて取り合はなかつた。そんな子供らしい遊びには興味がなかつたらしい。晶子は今はもう娘の扱ひで以前のやうにひとり自由にお臺場へも行けないので姉を誘ふとこの始末に、仕方なしの氣晴しに子供の時から氣に入りの屋上の物見へ出て海に眼を放つたが三つ四つ煙る帆にもなぐさまず、うらうらと海に照る日が反つてうらめしい。菫がどつさり手を出してお臺場から招いてゐるやうな。あきらめて机の前に來ても白樂天の文字と文字との間に、滿開の菫が踊るやうな形をしたり半開のがうなだれて立つたりして文字を見失はせたり見損ねたり、三日目は滿足に運ばなかつた。それでも夜に入つて心も落ちつきやつと業は卒つた。

ひとりでは到底判らないのを、いよいよ讀んでもらへると心もときめき、ひたすらに明日が待たれた。かういふ憧れや思ひ立つとかう一途なのがこの娘の生れつきなのであつた。

四

自分の手で小さな寺子屋机を、庭に近く明るいところに持ち出し、その下座に坐つて師の出るのを待つてゐると、次の間では二三度きせるをたたく音があつて後、のつそり襖を出てつかつかと、構へられてゐる机の前の座を占めて弟子の鄭重な一禮を受けるのが、以前から今日も變らない師匠の習慣である。

樋口氏は机の上に置かれてゐたこの間の古冊子をそつと取り上げながら、

「もう寫してござつたかの、ちよつとそちらの寫本の方をもお見せ」

云はれて弟子は手に弄んでゐたのを差し出す。渡されたのを、ひらいてぱらぱらと目をとほし、

「ほう、これは見事に。手もしばらくの間に大そう立派におなりぢやな」

小娘は兩の手で顔をかくして羞しさを現すかのやうなしなを見せてゐたが、

「いつも父からは、お前そはそはした女やよつて文字にも、落ちつきのない人がらが出て見ぐるしい云うて叱られて居ります。ほんたうにおしまひの方なんかもうめつちやくちやです——間違ひだらけ」

と手を顔からとりのけた。

師匠はなほも丹念に寫本を繰つてゐたが、

「ところどころに不審紙がしてあるやうぢやの、あの本には返り點もあつたし、白詩はやさしいものだから源氏がわかるほどなら、ひとりでも讀めたらうと思ふが、誤字もところどころ見え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com